
魔術学院の恋愛事情

香月航

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術学院の恋愛事情

【Nコード】

N0530Z

【作者名】

香月航

【あらすじ】

とある魔術学院のとある平凡な私と、何故か非平凡な彼と恋をしたりしなかったりする…かもしれない話。

こちらは個人サイトで公開している作品の番外編になります。単体でもお楽しみ頂けるように書いて参りますが、詳しい世界観などは大元の作品をご確認下さいませ

00:ある放課後のこと（前書き）

個人サイト作品の1周年記念?で書いて参ります、息抜きSSです。
ゆるーっと適当にお砂糖話をお楽しみ頂ければ幸いです。

00:ある放課後のこと

オレンジ色の日差しが、見慣れた教室の天井を染め上げる。

昼と夜の間、世界の全てが赤になるこの時間は、とても美しいと思う。

そう、例えばそれが“視界を埋める大半”の背景に過ぎないとしても。

「どこを見ている？」

背筋に響く低く甘い声色に、投げかけた思考が連れ戻される。

整った輪郭を滑り落ちるのは、まるで刃の^{やじら}ような輝く青銀。

対象的に、私の間抜け顔を映すキレイ長の瞳は金色。

彩^{いろで}られた内側には、すっと筋の通った鼻と抜群の位置で引き結んだ唇。

あれだ、よーするに、すっごい美形が

何故か私の超至近距離にいらっやいます。

「……………」

両手首を捕まれ、背中後は後ろの机に縫い付けられたように動かない。整ったお顔は吐息がかかるような距離で、今も刻一刻とその隙間を狭めつつある。

「…あの、先輩。聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「なんで私、名前も知らない先輩に押し倒されているんでしょう？」

01：別世界で生きてくれよ

『魔術』と呼ばれる魔道技術を至上とする王国・ロスヴィータ。

この国において、唯一の国立の学び舎であり、その道の最高峰の名門校がある。

才能のある者ならば出自を問わず、15歳から入学が可能。

全寮制で、在学期間はどの私立学校よりも長い6年間。

それがここ、『ロスヴィータ王立魔術学院』

運よく才能を持って生まれた私、メリル・フォースターは、運よくこの名門校に入学でき、今年で二年目になる。

魔術師として特筆するような部分はないものの、クラスの友達とも寮の相方とも問題なく、日々平穩に暮らしている。

……暮らしていたのだ。

そう、平凡で何もない毎日を楽しく生きていたのだ。

（…はい現実逃避終了）

目を開けば、相変わらず夕日に染まった教室の一角。

至近距離には美形の先輩がいらっしゃる。

一体何がどうしてこうなってしまったのか。

とりあえず、私が投げかけた『知らない』と言う事実には、先輩は整った形の眉をひそめている。

気分を害したとしても仕方ない。知らないものは知らないのだから。

「…俺は六年のギルベルト・クラルヴァインだ。それなりに有名なつもりだったが、こんなものか」

「ああ、クラルヴァイン先輩。名前だけ聞いたことあります、少し」

「そ、そうか」

眉間の皺を一本増やして、深く息をはく。

先輩、この距離のため息つかれるとすごくすぐつたいですマジやめて。

ともあれ、最上たる六年のクラルヴァイン先輩と言えば、確かに下級生でも聞く名前だ。

クラルヴァイン家は確か、子爵位を賜る貴族でありながら、魔術の名門としてもその名を連ねている。

加えて先輩本人のこの整いまくった容姿とくれば、有名じゃない方がおかしいだろう。

…私のように、なーんの興味も関係もない庶民がいるのも事実だけだ。

「それで、名門家の先輩が一平民の私に何の用でしょう？」

自分で言うのも何だが、私は本ツ当に平凡だ。

普通の家庭で生まれ、普通の娘として育てられ、学院に入れたものの成績は真ん中やや下め。

容姿も先輩とは違い、礼賛の言葉には縁遠い。あと貧乳。

どう考えても先輩とは住む世界が違う。

こんな事態になっていることが、まず何かの間違いとしか思えない。

「この体制から連想するようなことは、そう多くはないのではないか？」

「寝技の練習ですか？」

「斬新な返しだな」

「あとはすごい目が悪くて、誰かと間違えたとか？」

「あいにくと、視力が下がった覚えはないな。メリル・フォースタ

「」

…残念ながら、呼ばれているのは私の名前だ。
同姓同名の美少女がいると言う噂も聞いたことはない。

「名前でも構わないか？」

「…っ！」

左手の拘束が解かれて、離れた流れのままに指先が頬にふれる。

「くすぐつたいです」

「じきに慣れる」

ゆつくりと輪郭を滑りおりて、顎の辺りで一度止まる。

軽く上を向かされれば、もう影の重なるような位置にご尊顔がある。

「……………」

「……………」

視界を埋める男性の姿は、びっくりするほどきれいだ。
赤い日差しが濃い影を落として、より一層整った輪郭を際立たせる。
このまま絵画として切り抜いて飾ってしまえるぐらいに。

……けど、なぜかときめきは沸いてこない。

(……瞳に、熱がない)

この上なく近くにいるのに、『観察されている』とでも言うのだろうか。

ますます美しい色を魅せる金眼は、何の感情も映さずにこちらを見ている。

「…珍しい反応をするな」

「そうですか？」

「俺がこの距離までせまって、無表情を通す女は初めてだ」

「貴方こそ、色事を構えるような表情ではありませんよ」

瞬間、初めて先輩の顔に表情らしい表情が浮かんた。

きよとん、と。音がしそうなぐらいの、ちょっと間の抜けた驚きだ。

「…そんなこと、初めて言われたな」

「いつもあの無表情顔で女性にせまっていたんですか。割とひどいですね」

「そんなに酷い顔をしていたのか」

すつと、予想よりもアツサリ拘束が外れる。

大きな影がどいて、開けた視界に鮮やかな夕日が見えた。いつの間にか紫が混じり始めたそれは、もう間もなく暮れてしまうだろう。

予想以上に時間が経っていたみたいだ。
そろそろ学院を出ないといけないのだけど…

「あの、先輩？」

人の世界を遮断していた男は、何やら少し落ち込んでいる様子だ。
…立ってみると、私よりも頭ひとつ以上背が高い。
腰から下の長さは、もはや嫌味の領域だわ。

「先輩、用事がないのなら私は帰ってもよろしいですか？」

だから、口調に少々トゲがはえてしまうのも、ご容赦頂きたい。
家柄がよくて顔がよくて、おまけにスタイルも抜群とか。どこまで
天にえこひいきされているのだから。

「ああ、悪い。用件を伝えていなかったな」

「…出来れば口頭で伝えて頂きたかったですよ」

しかも、先ほどまで初見の女を押し倒していたと言うのに。
いとも平然と。全く、何事もなかったかのように立っているのが、
また腹立たしい。

……私はこの17年の生の中で、あんなことをされたのは初めてだ
ったのに。

「それで、何のご用事だったんですか？」

色んなことが重なって、胸がムカムカしていた。
私はとにかく早く帰りたいかった。
住む世界が違いすぎる彼と、これ以上同じ部屋にいたくなかった。

……今になって思う。

あの時、用件を聞かずにそのまま逃げてしまっていたら、結末は変

わっていたのだろうか。

「では、単刀直入に。
メルル・フォースター、俺の子供を生んでくれ」

「……………は？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0530z/>

魔術学院の恋愛事情

2011年12月1日23時47分発行